

## 口臭を気にするのは公衆道徳か？

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

フランスで六年半ばかり暮らしたが、ひとつ奇妙なことに気がついた。口臭を感じさせる人が減多にいないことだ。この六年半の間に、そんな人に出会ったのは二、三回ぐらいしかないし、それも、遠くからかすかに匂ってきたという程度のごく軽いものだ。

家内の説では、フランス、とりわけ私たちの住んでいるパリの空気は乾燥していて、日本のように湿度が高くないので、全体的に匂いは抑えられているということだった。

そう言えばいくつか思い当たることもあって、例えばパリの街の魚屋さんも、あまり生臭い匂いを放ってはいない。匂いを感じさせる閾値が高いのかななどと思ってしまう。

その他の食料品店、カフェやレストラン、街なかに置かれたゴミのケース、アパートの内部にも、ほとんど気になる悪臭はなくて、匂いに関しては、いわば中立的と言える

例外的なのはチーズ屋の匂いで、これは日本にはちょっと無いものだ。私は、慣れていないせいかその匂いに圧倒されて、フランスではすっかりチーズ嫌いになってしまった。日本に戻ってきて、再びチーズの良さを見いだしたというのが実状である。

それでも、フランスだからこそ、あんな程度の匂いで収まっているわけで、日本であのようなチーズ店を出したら、それこそ強烈な匂いは倍増するだろうし、そこは、おそらく、お客の寄りつくような場所ではなくなってしまうだろう。

彼我の違いを感じさせる現象はいくつかあって、私自身のオーデコロンの使用量も、日本ではかなり控え目にしていないと、周りの人たちを驚かせることになる。

フランスでは、女性が大量の香水を体や衣服に振りかけても、適度な香りを保っていられるが、日本でもついその気になって同じことをしようものなら、街なかで人々のヒンシュクを買うこと請け合いである。

香水の国フランスと言われる。一説では、日頃あまり風呂に入らない貴婦人方の悪臭を消すために香水が使われ発達したとされているが、これが日本だったら、元々の悪臭を消すことなど到底できないし、その上に香料をたっぷり振りまけば、それこそ匂いのお化けになってしまうことは間違いない。

以上、思いつくまま匂いにまつわることを並べてみたが、とにかく、パリで人々と話をしている口臭を感じる人が減多にないということは、私も妻もひとしく認める事実なのだ。私は、近所に住んでるエスデーフ（お乞食さん）と話をしたこともあるが、その男も、不快な思いをさせるようなことは全く無かった。

私自身、日本にいた頃は自分の呼気が多少は気になったものだが、パリに着いてからしばらく経つうちに、そんなことなどまったく意識しなくなってしまった。

周囲もそんな雰囲気だったし、フランス語で話をするのが大変だったこともあって、世の中にそんな気遣いがあるなどということは完全に忘れてしまっていた。

フランスでは、顔を突き合わせて話をする人が多い。そんな時、自分の口臭など気にしないで、自由に、気楽に、思いつ切り喋れるのはどんなに良いことだろう。これほど快適なことは無いとさえ言える。

人間関係の基礎はこんなところにあるのではないかとさえ思えるほどだ。みんなとペチャクチャ・ワイワイやっているうちに、私には思いがけないほど多くの友人や知人ができた。それも老若男女の区別なしにだ。

顔を近づけあって話をしても何の気兼ねもない。その代わり、顔にツバを飛ばされたことは何度かあった。しかし、そんなことは、人間的な交わりが得られるということから言えば大したことではない。

とにかく、フランスでは、相手が若い女性でも老人でも、意識的なこだわりなしに思う存分話できたのだが、このことは非常に貴重な体験であった。

ところがである。日本に戻ってきていくらも経たないうちに、話をしていると妙な動作をする人が大勢いることに気がついたのである。自分の鼻や口に手をかざして話をする人だ。こんな動作をする人には、フランスでは一度も出会ったことがない。

常時そんな格好をしているわけではないが、時々自分の鼻や口を手でさえぎって話をするのである。おや、俺の息が匂うのかなと、つい心配になってしまうような身振りなのだ。そのせいか、日本に帰ってきた私は、再び自分の呼気が気になり始めたのである。忘れていたことを思い出したのだ。

もしかすると、相手が気にしているのは本人自身の呼気で、そういう動作は、他人に悪臭を浴びせてはならないという公衆道徳の現れなのかも知れない。しかし、会話中にそんな格好をすると、逆に「お前のクサイ息をやたらと吹きかけるな」という合図とも脅しとも取られかねないのである。

いずれにせよ、話をしている相手にそんな不安感情を抱かせるとしたら、その行為じたいは決して道徳的なものとは言えないであろう。

日本では、人々を不安に陥れ、意識過剰にさせるような言動が多いことは否定できない。会社勤めの女性たちを対象に統計を取ってみたら、職場で一番嫌いなものは上司の口臭だという答が最も多かったということを、或るテレビ局が報じていた。

会社のすべての高齢者に口臭があるわけではないであろう。しかし、この答がすべての高齢者を不安にさせることは確かである。こういう状況の中で鼻や口を押さえて話をする部下の姿を見たら、上司は言いたいことも自由に言えないような気分になってしまう。

そこから、年齢による差別が始まり、人間関係の自由な展開が阻害されるようになるのは間違い

ないであろう。

私は、こういう女性たちが、少女時代の思い出を職場に持ち込んでいなければよいと思うのである。彼女たちの中には、子供の頃には父親の匂いを嫌がり、父親や周囲の高齢者たちとの対話を断絶して育ってきた者も多いのではないだろうか。

世代間で無差別・無条件な対話ができないという状況が、特に日本では進んでいるように見えるが、その原因は案外卑近なところにあつて、口臭の有無、その意識、その嫌悪感にあるように思えてならないのである。

もう少し広い意味でまとめて言えば、最近さかんに話題になっている「加齢臭」ということが、世代間で仲間を嗅ぎ分けるための具体的・直接的な要因になっているように思える。

これによって、新しい世代と古い世代との分裂が、ひいては人間同士の分裂が進んでいるとさえ言えるのだが、この状況に危機感を覚える古い世代は、加齢臭や口臭止めの薬品を用いたり、色々な処置を施したり、頻繁に歯を磨いたり、洗浄液でウガイをしたりと、「清潔感」を取り戻すために懸命な努力をしている。

しかし、私がフランスで体験したことから言うと、この国ではあまり口臭が感じられないという環境的な優位があるものの、問題はただそれだけではないという気がするのである。

薬剤や道具類を用いてただ匂いを消すというだけでは解決しない別の問題があるということ、こういう環境にいるからこそ、かえって感じ取ることができるのだとも言える。口臭対策には、単に物質的なものだけではなく、意志的なものも必要なのである。

このことに関連して、フランスで見た面白い現象について触れておくことにしよう。あれほど自由活発に、口臭のことなど全く意識せずに喋りまくっているフランス人が、エクストリル (Hextril) という口腔洗浄剤をさかんに用いているという事実である。

薬局へ行くと、棚にはずらりとこの薬品が並んでいるのが目につく。かつて日本でモンダミンという洗浄液が流行った時の比ではない。

多くのフランス人がこのエクストリルでガラガラやっているということは、現在自分が抱えている口臭の悩みを、これによって直ちに消し去ろうとする直接的な欲求があるからというわけではない。

それでは何のためにやっているのだろうか。そこに彼らのもっと大きな意志的目標、生活への姿勢を見ることができるのだが、そのことについては稿を改めて書くことにしよう。

[2007/12/27 magmag]